

題目：クライアントの内的体験理解の鍵としてのアタッチメント理論の意義

田附紘平

論文要旨

本研究は、クライアントの内的体験理解の鍵としてアタッチメント理論が果たす意義について検討することを目的になされた。

序章では、クライアントの内的体験理解を深めるためにアタッチメント理論にもとづいて研究を行う意義を述べた。アタッチメント理論は乳幼児と養育者の二者関係について探究するものであり、精神分析にその起源をもつ。心理療法もクライアントとセラピストの二者関係を基本とする営みであることから、アタッチメント理論は心理療法におけるクライアントーセラピスト関係の力動的な理解、つまり転移理解を深めることに役立つと考えられた。しかし、アタッチメント理論はこれまで精神分析においては重要視されてこず、主に発達心理学で発展してきた。近年、力動的な心理療法においてアタッチメント理論の重要性が再認識されるようになってきているが、アタッチメント理論と関連づけてなされた心理療法に関する研究にはクライアントの立場からの体験の理解に乏しいという課題があることが指摘された。

第一章では、アタッチメント理論の歴史的変遷を追いながら、アタッチメント理論と精神分析の間の隔たりについて検討を行った。古典的なアタッチメント理論の概略とそれへの精神分析からの批判をふまえると、古典的なアタッチメント理論と精神分析の間の隔たりは外的現実と心的現実のいずれかが重視されていることに原因があると指摘された。実際には純粋な外的現実や心的現実が存在せず、両者は一体となって当人の心的世界を構築していると考えられることから、相互の密接な関連を前提とした「reality」および「actuality」の概念を導入した上で、近年のアタッチメント理論の展開を概観した。その結果、近年のアタッチメント理論は「reality」および「actuality」の概念で考えるとすれば、それらの不可分性を前提とした捉え方をするように変化しており、その考え方は間主観的なアプローチをとる精神分析とも共通していることが示された。そして、アタッチメント理論と間主観的な精神分析がともに理解を深めようとしている「当人が実在する外界と関わるなかでその場を意味づけ、迫真性をもって体験すること」を内的体験と定義した。しかし、近年のアタッチメ

ント理論は情報処理理論にもとづいて当人の外側の視点から内的体験を推測，説明するのに対し，間主観的な精神分析はクライアント自身の視点から内省的に描かれる内的体験を明らかにしようと試みており，近年のアタッチメント理論と間主観的な精神分析の間には，内的体験を捉える視点に差異があることを論じた。

第二章では，まずクライアントのアタッチメントパターンから内的体験を検討する意義を論じた。その上で，アタッチメントパターンの測定や各パターンの特徴について整理し，本研究におけるアタッチメントパターンの捉え方を示した。そして，クライアントのアタッチメントパターンと心理療法の関連についての先行研究を概観し，その成果と課題について検討した。その結果，クライアントのアタッチメントパターンは，(1) 効果研究，(2) プロセスに関する研究，(3) 事例，著者の臨床経験および **Adult Attachment Interview** による知見をもとにクライアントの特徴を具体的に記述した研究のなかで論じられていた。クライアント自身の視点にもとづいた内的体験を検討していながらも，そのような問題意識はもっていない萌芽的研究もみられたが，先行研究には主にクライアントの外側の視点から検討がなされるという特徴があることが指摘された。クライアント自身が心理療法という場をどのように意味づけ，そこでどのような体験をしているかについて正面から検討することで，クライアントの本質により迫ることができると考えられた。

第一章でアタッチメント理論の歴史的変遷，第二章でクライアントのアタッチメントパターンと心理療法の関連についての研究の概観から，クライアントに主観的に捉えられた内的体験を探究する意義が示された。

第三章から第六章では，クライアントによる心理療法の意味づけや体験について理解する手がかりを得るために基礎的研究として行った調査研究について論じた。いずれの調査研究も非臨床群の大学生，大学院生を対象に実施されたものであった。

第三章では，アタッチメントパターンと自己イメージの関連を検討した質問紙調査について述べた。20 答法を用いて自己イメージを測定し，得られたデータをテキストマイニングおよび個別事例から検討することで，調査者が設定した外的基準にもとづいた自己イメージではなく，各アタッチメントパターンに

おける自己イメージの内的意味構造について明らかにすることを試みた。その結果、アタッチメントパターンにそれぞれ特徴的な自己イメージが見出された。これにより、各アタッチメントパターンをもつクライアントが自らについてどのような表象を有しているか、そしてその表象が心理療法の場で機能することで、彼らがどのようなことを体験しうるかに関して示唆を得ることができると考えられた。安定型は、社会的で肯定的な自己イメージを抱いており、回答当初は戸惑いを覚えていたために客観的な事柄を記述していたが、次第に表現を深めていったことが示唆された。軽視型は、防衛的で肯定的な自己イメージを抱いており、誇大的な理想像もちながらも、実際にはそのように生きられない苦しみを感じていることがうかがわれた。そのような誇大的な理想にほころびがみられることもあったが、それは軽視型にとって相当な苦痛の体験であったと考えられた。とらわれ型はアンビバレントな対人関係や自らへの否定的な感覚を中心とした自己イメージをもっており、最初から最後の項目まで一貫して不安や苦悩を強く表明していたことが特徴的であった。おそれ型は対人関係と能力から自己イメージを形成しやすく、特に人との接触に敏感であることが指摘された。彼らは二面性のある自己イメージをもっており、周囲からみられる姿と主観的な内的体験にギャップがあることもうかがわれた。その背景には、周囲の目を気にしており、過剰適応的に他者に合わせるあり方があることが示唆された。また彼らは内省する力をもっていることも指摘された。

第四章では、アタッチメントパターンと親イメージの関連を検討した質問紙調査について述べた。第三章と同様、アタッチメントパターンと親イメージの内的意味構造の関連をテキストマイニングおよび個別事例から検討した。その結果、アタッチメントパターンそれぞれに特徴的な親イメージが示された。これにより、各アタッチメントパターンをもつクライアントが親をはじめとした重要な他者に関してどのような表象を有しているかや、心理療法においてセラピストに向けやすい情緒について探究する手がかりを得ることができると考えられた。さらに、アタッチメントパターンと内的表象の関連について理解を深めるために、同一調査協力者における自己イメージおよび親イメージの 20 答法の回答をアタッチメントパターンそれぞれで取り上げ、事例的に検討した。それらの結果として、安定型は、社会的な側面や自分との良好な関係を中心に

親イメージを抱きやすいことが示された。また、彼らは親に対して基本的には子どもを見守りながら、いざというときには頼りになるという思いをもっていることがうかがわれた。安定型がこれまで適応的に生きてきたやり方では立ち行かなくなってきたときに親をはじめとした重要な他者にいかに助けを求めることができるかが大切になると考えられた。軽視型は、肯定的な親イメージを抱いており、自分との関係から親を捉えやすいことが示された。彼らは親の否定的な面も認識してはいるものの、それをあまりみないようにすることで対処していることが示唆された。さらに、軽視型は自分が大切にしている領域を守りたい意識が強いため、親との交わりにくさ、あるいは交わったときには侵入される感覚も抱いていることが指摘された。とらわれ型は、親に対して、自分と良好な関係であることを強く意識しつつも、否定的な情緒もあわせて抱えていることが示された。また、とらわれ型にとって親は唯一無二の存在でありながらも矛盾を抱えたよくわからない存在でもあることが指摘された。さらに、彼らはそのような親と心理的に一体となっており、分離したいと思っていながらも実際には難しいことがうかがえた。その背景には、彼らは親と密着した関係を保つことで、自らが個として存在することへのよるべなさを覆い隠しているところがあると指摘された。おそれ型は、とらわれ型と同様、親と自分の良好な関係を意識しつつも、親を否定的にも捉えていることが示唆された。彼らは親の思いと実際の言動の違いに不満を抱いていたとしても、それを直接あらわさずに自分のなかに保持している可能性が指摘された。さらに、おそれ型は親を横並びの関係にある存在として意識し、ライバル視しているところもあると考えられた。

第五章では、アタッチメントパターンとセラピストへの注目や印象の関連を検討した心理療法場面の映像観察調査について述べた。この調査では、特にセラピストの表情、仕草、言葉の非言語的側面といった、非言語コミュニケーションへの注目やセラピストへの印象とアタッチメントパターンの関連を明らかにすることを試みた。セラピストへの注目については、アタッチメントパターンを規定する見捨てられ不安および親密性の回避の各次元で特徴的な結果が示され、セラピストへの印象については不安定型のアタッチメントパターンで有意な結果がみられた。これらは、各アタッチメントパターンをもつクライエン

トがセラピストのどのようなところに注目し、どのような印象を抱くかについての理解に役立つと考えられた。見捨てられ不安低群（安定型と軽視型）は高群（とらわれ型とおそれ型）よりもセラピストの動作に注目しやすく、高群は低群よりもセラピストの表情に注目しやすかった。また、親密性の回避低群（安定型ととらわれ型）はセラピストの言葉のうち、言葉の内容に注目しやすく、高群（軽視型とおそれ型）は言葉のリズムやトーンに注目しやすかった。セラピストへの印象については、軽視型はセラピストに中立的な印象を抱きやすく、悪い印象を抱きにくかった。とらわれ型とおそれ型はセラピストに悪い印象を抱きやすかった。これらの結果から、各アタッチメントパターンをもつクライアントがセラピストの各側面に注目する意味および、彼らがセラピストに抱きやすい思いについて考察した。

第六章では、アタッチメントパターンと自分について語る体験の関連を検討した面接調査について論じた。得られたデータを M-GTA および個別事例から検討した結果、自分について語る体験プロセスについてもアタッチメントパターンによってそれぞれ特徴があることが示された。これは、各アタッチメントパターンをもつクライアントが心理療法において自らについて語る際、葛藤や情緒などの言葉によって表現される体験プロセスをどのようにたどるのかについて理解を深める手がかりになると考えられた。安定型は、相手に話をする不安から話の思い浮かばなさを感じるが、それでも最終的には一定の満足感を抱いていたことが指摘された。また、彼らは、自分について話すときに日常の対人場面で用いている方略をとることで、否定的な情緒を抱かないようにしていたと考えられた。軽視型において、相手に話をする不安が、話が思い浮かばないことを経由してしんどさに結びついていくこと、淡々と話すとは意識されていないことが特徴的であった。先行研究も考慮に入れると、軽視型は、自分について語ることから生じる否定的情緒に関しては、表出されていないとしてもたしかに実感されている可能性が示唆された。また彼らは、目の前の相手を信頼できるかどうかにおそれを抱いていることが指摘された。とらわれ型において、相手に話をする不安から話がよく思い浮かぶことに結びつくのが特徴的であった。さらに、とらわれ型は様々な情緒を体感していたと考えられたが、このことは周囲からみた彼らの特徴と一致していた。彼らは、自分について話す

ことで、混乱した思考を整理し、俯瞰的な視点をもつことできる可能性が示唆された。おそれ型は、話したことによる情緒として肯定的なもののみを意識していたことが特徴的であった。また、先行研究も含めて考えると、おそれ型は、軽視型とは対照的に、自分について語る体験から生じる否定的情緒については、表出しないだけでなく、体験さえしていないことが指摘された。彼らは実際にこのような肯定的な体験をしていた一方で、調査者や調査状況に合わせていた可能性も示唆された。

そして終章では、これまで検討してきた各アタッチメントパターンをもつクライアントの内的体験の特徴を仮説としてまとめ、二つの症例検討を通して治療的变化をもたらすクライアントの体験について論じた。ここでは、クライアントの治療的变化には、セラピストがクライアントの内的体験を適切に理解し、伝えるだけでなく、クライアントがセラピストを、自らを信じる生身の他者として、あるいは自身の内的体験をともに実感する存在として迫真性をもって受け止めることが重要であると指摘された。最後に、本研究全体を通して総合考察を行った。クライアントの内的体験理解の鍵としてアタッチメント理論が果たす意義は、各アタッチメントパターンを示すクライアントがどのような内的体験をしやすいかに関する仮説を提供すること、および心理療法において実在するセラピストが異質性と同質性の二重性を孕んだ存在としてクライアントに迫真性をもって体験されること自体の重要性を示すことにあると指摘された。本研究による検討から、アタッチメント理論はクライアントの内的体験理解の鍵として機能すると論じられた。本研究の課題として、心理療法に関する研究でありながらも症例検討を除いて実際の心理療法事例を用いた検討がなされておらず、非臨床群を対象とした調査研究で得られた結果をそのままクライアントの内的体験と捉えるには慎重になる必要があること、調査協力者がみな青年であり、セラピストのアタッチメントパターンや組織化されていないアタッチメントパターンについて検討されていないこと、主観的な内的体験について客観的に考察することで、体験が外側の視点から捉えられたものとなっていた可能性が挙げられ、それらは将来的な発展可能性をもった今後の展望でもあることが示された。